６３６１－１２９１
平成２２年１２月２７日

各関係機関の長
各病害虫防除員　　殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成２２年度病害虫発生予報第９号について

平成２２年度病害虫発生予報第９号を発表したので送付します。

平成22年度病害虫発生予報第９号

向こう１か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の平年比	記載ページ
施設果菜類	1 病害全般	―	2
	2 タバココナジラミ類	―	2
冬春きゅうり	1 べと病	やや少	2
	2 うどんこ病	並	3
	3 褐斑病	やや少	3
	4 灰色かび病	並	3
	5 菌核病	並	3
	6 ミナミキイロアザミウマ	並	3
	7 病害虫全般	―	3
冬春ピーマン	1 斑点病	やや多	4
	2 うどんこ病	並	4
	3 菌核病	並	4
	4 黒枯病	前年、前々年より多い	4
	5 アザミウマ類	やや多	4
冬春トマト	1 葉かび病	並	5
	2 灰色かび病	やや多	5
	3 トマト黄化葉巻病（TYLCV）	前年より少ない	5
	4 タバココナジラミ類	やや多	5
冬春いちご	1 うどんこ病	やや多	6
	2 炭疽病	やや多	6
	3 アブラムシ類	やや多	6
	4 ハダニ類	やや少	6

○作物の生育状況（12月中旬）

12月中旬の冬春きゅうり、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春いちごはいずれも収穫期であった。

○向こう１か月の気象予報

天気は平年と同様に晴れの日が多く、気温は平年より低い確率70％、降水量は少ない確率50％、日照時間は平年並または多い確率ともに40％と予想されている。

（１か月予報　鹿児島地方気象台12月24日発表）

○発生予報の根拠および防除対策

施設果菜類

1　病害全般

（１）気温の変化等には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。特に、コスト低減のため、ハウスサイドや内ホロを多層被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので注意する。
また、多発してからでは防除効果が劣るので、初期防除を徹底する。
きゅうり：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病など
ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病など
トマト　：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

2　タバココナジラミ類

［予報の根拠］
（１）冬春きゅうりでのコナジラミ類の発生面積率30.0％（平年27.0％）、100葉当たり虫数1.9頭（平年3.3頭）はいずれも平年並である。
（２）冬春ピーマンでの発生面積率50.0％（前年6.7％、前々年35.7％）、100葉当たり虫数3.5頭（前年0.3頭、前々年2.2頭）で、いずれも前年、前々年より多い。
（３）冬春トマトでの発生面積率46.2％（平年34.6％）は平年よりやや多、100葉当たり虫数1.3頭（平年3.6頭）は平年並である。
［防除上の注意］
（１）タバココナジラミバイオタイプＱとシルバーリーフコナジラミの形態上の差異は、肉眼での識別は困難である。
（２）施設開口部に防虫ネット（0.4ｍｍ目以下）を必ず設置するとともに、光反射マルチ等の物理的防除手段を利用する。
（３）黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
（４）タバココナジラミバイオタイプＱに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
（５）施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
（６）有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一系統薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低い微生物農薬やコナジラミ類を物理的に窒息死させる気門封鎖剤を防除体系に組み込む。

冬春きゅうり

1　べと病　（やや少）

［予報の根拠］
（１）12月中旬の発生面積率25.0％（平年58.5％）は平年より少、発病葉率4.1％（平年9.4％）は平年よりやや少である。
［防除上の注意］
（１）湿度が高いときには多発しやすく、多発すると防除が困難となるので予防散布に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底する。
（２）窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように適正な肥培管理に努める。

2 うどんこ病　（並）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率35.0％（平年42.0％）は平年並、発病葉率1.9％（平年3.7％）は平年よりやや少である。

［防除上の注意］

（１）病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。

（２）薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

（３）乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

3 褐斑病　（やや少）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率10.0％（平年28.5％）、発病葉率0.3％（平年2.8％）はいずれも平年よりやや少である。

［防除上の注意］

（１）多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。

（２）窒素質肥料の多用は発病を助長するが、逆に少ないと草勢の低下を招くので、適正な肥培管理に努める。

（３）下葉の発病葉はほ場外に持ち出し処分する。

4 灰色かび病　（並）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の巡回調査では発生未確認である。（平年：発生面積率2.0％、発病株率0.1％）

［防除上の注意］

（１）曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

（２）発生初期の防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

5 菌核病　（並）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率5.0％（平年7.1％）、発病果率0.3％（平年0.2％）はいずれも平年並である。

［防除上の注意］

（１）曇雨天が続く時は、日中でも加温機を稼働させるなど除湿に努める。

6 ミナミキイロアザミウマ　（並）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の巡回調査では、20ほ場のうち6ほ場で微発生(注)(葉当たり虫数0.5頭未満)が確認されている。（平年：発生面積率4.7％、葉当たり虫数0.1頭）

［防除上の注意］

（１）多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

7 病害虫全般（改植時の留意点）

［防除上の注意］

（１）ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、以下のことに留意し、次作の発生源を絶つように努める。特に前作において、キュウリ黄化えそ病が発生したほ場においては必ず実施する。

①前作きゅうりの栽培を終了する前に、殺虫剤を７日間隔で３回散布する。

②栽培を終えたら、ハウス内の除草を徹底するとともにきゅうりを完全に抜根する。

③抜根後は、最低でも10日間は蒸し込む。(平均気温が20℃のときの蛹期間が約７日であることから、蒸し込みによる施設密閉高温化が最低でも10日間は必要。)

④蒸し込み期間中は、粘着板を設置し成虫を捕殺する。
⑤後作きゅうりの定植時には、必ず粒剤を施用する。

（２）前作に褐斑病などの発生があった場合には特に注意し、定植後直ちに予防防除し感染を防ぐ。

冬春ピーマン

1 斑点病 （やや多）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率57.1%（平年27.7%）、発病葉率3.7%（平年1.6%）はいずれも平年よりやや多である。

［防除上の注意］

（１）多湿条件では、発病や病勢の進展が助長されるので除湿に努める。

（２）病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

2 うどんこ病 （並）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率42.8%（平年54.4%）は平年並、発病葉率9.5%（平年6.3%）は平年よりやや多である。

［防除上の注意］

（１）乾燥した条件で発生しやすいので、過乾燥に注意する。

（２）本病菌は組織内部に侵入して繁殖し、他の作物のうどんこ病のように葉表が白粉をふりかけたようにはならないので、葉裏を中心に観察し早期発見に努める。

（３）病勢が進展してからでは防除効果が低いので、発病を確認したら早めに防除する。

（４）上位葉への進展が見られるなど病徴の激しいほ場においては、１回散布では防除効果が現れにくいことがあるので、１週間間隔で２回以上の防除を実施する。

（５）微生物農薬は予防的効果が主であり、特にダクト散布では散布ムラが生じやすいので、定期的に化学農薬も併用する。

3 菌核病 （並）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の巡回調査では発生未確認である。
（平年：発生面積率2.6%、発病株率0.1%）

［防除上の注意］

（１）地表面の菌核からの胞子の飛散を防ぎ、ハウス内の湿度を下げるためにビニルマルチを行う。

4 黒枯病 （前年、前々年より多い）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率42.9%（前年0.0%、前々年21.4%）、発病葉率1.9%（前年0.0%、前々年1.2%)はいずれも前年、前々年より多い。

［防除上の注意］

（１）ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。

（２）被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

5 アザミウマ類 （やや多）

［予報の根拠］

（１）12月中旬のミナミキイロアザミウマの発生面積率71.4%（平年53.4%）は平年より多、10花当たり寄生虫数2.6頭（平年2.6頭）は平年並である。

（２）ヒラズハナアザミウマの発生面積率35.7%（平年27.0%）は平年よりやや多、10花当たり寄生虫数3.1頭（平年3.1頭）は平年並である。

［防除上の注意］

（１）ミナミキイロアザミウマは、10花当たりの寄生虫数が１頭から被害果が出始めるので、発見したら早めに防除する。
（２）ヒラズハナアザミウマは、生息密度が高まると被害が発生するので注意が必要である。
（３）卵・幼虫・蛹・成虫が混在しており、卵と蛹には防除効果が低いので、7日間隔で2～3回の連続した防除を行う。
（４）両アザミウマの薬剤感受性は異なるので、防除の際は使用する農薬に留意する。
（５）薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
（６）被害の激しい茎葉・果実のハウス外への持ち出し、マルチ被覆、青色粘着板の設置により生息密度の低下を図る。

冬春トマト

１　葉かび病　（並）

［予報の根拠］
（１）12月中旬の巡回調査では、13ほ場のうち1ほ場で微発生[注](発病葉率0.5%未満)が確認されている。（平年：発生面積率5.8%、発病葉率0.5%）

［防除上の注意］
（１）多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
（２）発病初期の防除を徹底する。

２　灰色かび病　（やや多）

［予報の根拠］
（１）12月中旬の発生面積率23.1%（平年4.2%）は平年より多、発病株率0.3%（平年0.2%）は平年よりやや多である。

［防除上の注意］
（１）日中の換気、夜間の保温を行い、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
（２）花弁の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

３　トマト黄化葉巻病（TYLCV）　（前年より少ない）

［予報の根拠］
（１）12月中旬の発生面積率7.7%（前年15.4%、前々年0.0%）、発病株率0.04%（前年0.93%、前々年0.00%）はいずれも前年より少ない。

［防除上の注意］
（１）タバコナジラミ類（媒介虫）の防除を徹底する。
（２）発病株は伝染源になるので、根ごと抜き去り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

４　タバココナジラミ類　（やや多）

［予報の根拠］
（１）12月中旬の発生面積率46.2%（平年34.6%）は平年よりやや多、100葉当たり虫数1.3頭（平年3.6頭）は平年並である。

［防除上の注意］
（１）施設野菜のタバココナジラミ類（２ページ）を参照のこと。

冬春いちご

1 うどんこ病 （やや多）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の葉での発生面積率61.6%（平年34.8%）は平年より多、発病葉率6.0%（平年4.1%）は平年並である。

［防除上の注意］

（１）葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。

（２）激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。

（３）発病果など被害部は、伝染源になるので早めに取り除き、ほ場内に放置しない。

2 炭疽病 （やや多）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率7.7%（平年6.6%）は平年並、発病株率0.8%（平年0.7%）は平年よりやや多である。

［防除上の注意］

（１）多湿にならないよう、ほ場の排水対策を十分行う。

（２）発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止する。

（３）次作の親株には、炭疽病及び萎黄病の未発生圃場からの苗を用意する。

3 アブラムシ類 （やや多）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率30.8%（平年23.0%）、寄生株率3.1%（平年2.8%）はいずれも平年よりやや多である。

［防除上の注意］

（１）開花期に薬剤を使用する場合は十分注意し、ミツバチに影響の少ない薬剤を寄生株とその周辺に部分散布する。

（２）株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと、防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

4 ハダニ類 （やや少）

［予報の根拠］

（１）12月中旬の発生面積率15.4%（平年43.0%）、寄生株率0.9%（平年9.8%）はいずれも平年より少である。

［防除上の注意］

（１）収穫期に寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。

（２）株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと、防除効果が高まる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。

（３）薬剤抵抗性が発達しやすいので、異なる系統の薬剤をローテーションで使用する。

（注）微発生とは、生息が確認されるが発生面積として換算する基準値に達しない密度の発生状況をいう。

○その他

1　農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

　　日本植物防疫協会ホームページ　http://jppn.ne.jp

　　農林水産省ホームページ　http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/

　　農林水産消費安全技術センターホームページ　http://www.acis.famic.go.jp/

2　農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。

3　発生量（程度）の区分

多　　い	（高　　い）	やや多いの外側１０％の度数の入る幅
やや多い	（やや高い）	平年並の外側２０％の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として４０％の度数の入る幅
やや少ない	（やや低い）	平年並の外側２０％の度数の入る幅
少ない	（低　　い）	やや少ないの外側１０％の度数の入る幅

（平年値は過去１０年間の平均）

4　予察情報の種類

　病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の５つです。

（１）予　　報・・・向こう１か月の発生状況を予測し、毎月２５日前後に発表する。

（２）注 意 報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

（３）警　　報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場に発表する。

（４）特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。

（５）防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○お知らせ

　病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/です。

【文書取扱】
病害虫防除・肥料検査センター　生頼
TEL:0985-73-6670　FAX:0985-73-7499
E-mail：byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp